

中国植林協力の現場では (1) 環境破壊と貧困の悪循環

緑の地球ネットワークが中国山西省大同市の農村で緑化協力を開始したのは1992年1月で、それから満17年がすぎた。スタート時はまったくの素人集団で、先行していた専門家から「いちばん困難なところで始めるなんて、素人は勇敢だ」と冷やかされたものだ。

案の定、最初は失敗つづきだった。中国側との呼吸もあわなかつたし、想像以上に自然環境が厳しく、植えた木はつぎつぎに枯れた。いっしょに始めた仲間は賢い順にいなくなり、資金も集まらなくなった。思い出したくもない、苦悩の期間が数年つづいた。

転機になったのは中国側に信頼できる有能なカウンターパートが現れたことと、同じ時期に日本の専門家が参加してくれたことである。それから苦難はつづき、成果が見え始めたのは最近のことである。

■砂漠化には原因がある■

「中国で砂漠化が深刻化している」と聞いて、すぐ思いつくのが「さあ、植林！」ということだろう。緑化協力を最初に思い立ったときの私もそうだった。でも、いまは少しちがう。

砂漠が砂漠であるのには原因があるし、砂漠化が進むのにもその土地固有の原因がある。大切なのはその原因を突き止め、それをなくすか、軽減することである。砂漠に木を植えれば、砂漠が砂漠でなくなるわけでも、砂漠化が止まるわけでもない。自然の条件を超えて無理なことをしても、結局は押し戻される。

私たちが通っている大同市は黄土高原の東北端に位置し、砂漠ではないが、砂漠化の深刻な地域である。その原因はなんだろうか。年間降水量の平均は400mmほどで、乾燥地としては少ないとはいえない

い。それだけの量がバランスよく降ってくれば、穀物生産にはいまほど困らないだろう。

ところが降り方に問題がある。第1に年ごとの変動がきわめて大きい。多い年は650mmほどになり、少ない年は250mmを切る。第2は1年のうちでも季節的にかたよることである。年間降水量の3分の2が6月～9月に集中し、その他の季節はほとんど降らない。とくに植物が芽生え育つ春の雨が乏しく、農民は「春の雨は油より貴重だ」といって待ちこがれるが、雨は降らない。種まきの適期を逸することがしばしばである。1990年代以降、この春の雨が減り、夏から秋にかけての雨が増える傾向にあり、農業にとっても植林にとっても、深刻な問題になっている。

雨は降れば降ったで問題を引き起こす。近年日本でもゲリラ的な集中豪雨が頻発するが、黄土高原の夏の雨はより極端で、ごく狭い範囲に短時間、集中的に降る。2003年7月には私たちのプロジェクトの付近で土石流が発生し、下流の村で4人の犠牲者がでた。2007年夏には山西省中部で2時間で180mmの雨が記録されたし、1時間70mmという雨を私もなにか体験している。

■水土流失がまねく砂漠化■

問題になるのが雨による土壌の浸食である。黄土高原は全体として草も木も乏しいので、雨が直接地表をたたく。黄土は平均の粒子が 20μ と小さく、乾燥しているときは固くしまってスコップの刃がたたないくらいだが、水にはもろい。少しでも水が加わるとグリスようになって流されてしまう。降った雨水もそこにとどまることがない。水と土が同時に失われることを中国では水土流失と呼ぶ。

水土流失がつづく、腐食を含んだ表土が流され、土地が劣化して、作物や植物が育たなくなる。



写真 1 七峰山段々畑

「山や丘陵の急斜面まで畑になる。耕して天に至るというのは誇張ではない。」

それが黄土高原における砂漠化である。黄土高原では夏に集中する雨が砂漠化を加速している。黄土高原特有の景観、ガリ＝浸食谷もこの雨によって形成される。

しかし、ここまでは砂漠化の原因の半分にすぎない。より重要な原因は人間の活動と関係している。

私が最初に黄土高原を目にしたのは、北京から西安へ向かう飛行機の窓からだった。1970年代前半のこと。不思議に思ったのは、眼下の山に地図と同じように等高線が引かれていることだった。現場に立ってその疑問が氷解した。山や丘陵の急斜面まで段々畑として耕されているのである。「耕して天に至る」というのは誇張ではない（写真1）。

「農業は大寨に学べ」という毛沢東の号令によって、農村建設のモデルとされた大寨を訪れたのもそのころだった。黄土高原と太行山脈の境界に位置する山間の村で、まさに刻苦奮闘によって畑を開墾し、山腹の傾斜地を水平な段々畑に変えていた。農民のその勤勉さに私は心から感動したものだ。ところが同じ時期に大寨を訪れた私の友人は、同じ風景を目にしたながら、「大寨では小鳥の声が聞こえなかった」と私に話した。当時の私は意味をよく理解できなかったが、ことばだけはしっかりと記憶に残った。森林が失われ、樹木がないことを、友人はしっかりと見てとったのである。

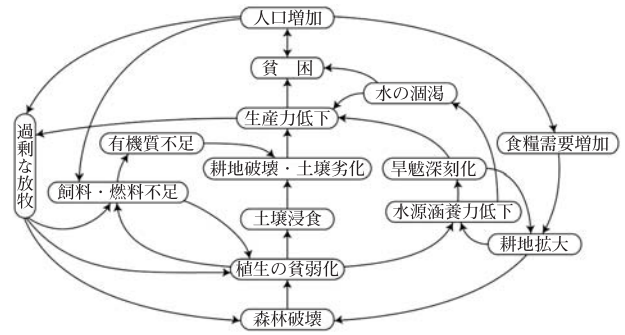


図 1 環境破壊と貧困の悪循環

■環境破壊と貧困の悪循環■

急増する人口をまかなうために、食糧を増産しないといけない。条件の悪いところまで開墾され、森林や草地が失われる。農耕だけでは生活できないので、ヒツジやヤギを放牧する。煮炊きのために木を伐り、灌木を根っこまで引き抜いて持ち帰る。だんだんと植生が貧しくなり、水土流失がひどくなる。畑や山から土壌が失われ、作物や植物が育たなくなる。生産性が上がらないから、貧困になる。貧困になればなるほど、子どもの数が増え、人口が増加する。このような悪循環が長くつづいたのである（図1）。

注意すべきは、この循環の内部にある人の努力だけでは、この悪循環から脱けだせないことである。かんたんに脱けだせるようなら、そもそも悪循環にならない。だれかが一念発起して貧困からの脱却をはかったとする。手っとり早い道はどこかを開墾して畑を広げるか、放牧の家畜の頭数を増やすことである。一人だけなら成功できたとしても、村の誰もがそのようにするなら、悪循環が強まるばかりである。どうしても、外部の支援が必要になる。

原因がこのような悪循環であるとすれば、砂漠化防止のためにすべきは、この悪循環をどこかで絶つことである。植林・緑化が有効であるばあいもあるし、ほかにも有効な方法があるはずである。同じ植林にしても、このような指向性をもったほうが、効率的になるにちがいない。

（（特活）緑の地球ネットワーク 高見邦雄）